

ボランティアの活躍による地域づくり支援チャレンジ課題

- 1 現状と課題 ○核家族化、高齢世帯や単独世帯の増加や価値観の多様化、さらにコロナ禍における活動機会の減少等により、地域住民における地域のつながりやコミュニティに対する関心の希薄化が進んでいる。
○また、地域づくりの担い手である若者の地域離れに歯止めがかからず、事態が深刻化している。
- 2 期待される効果 ○若者が、地域のヒト・モノ・コトとふれあうことで、地域を再発見し地域への愛着と誇りを育むことができる。
○若者が、地域住民と協働しながら、地域おこしやまちづくり等に取り組むことにより、自己有用感を得て、自主的に社会貢献活動に取り組むことができる。

- 3 事業実践方法 (1) 概要(目的)
本事業の趣旨と茨城県立鉾田第一高等学校における「総合的な探究の時間」の目指す生徒像*が一致していたことから、当該高等学校をモデル校として、2カ年計画で、生徒が地域の課題解決に主体的にかかわることができる体制づくりを支援した。
* 目指す生徒像:「グローバルな視点と行動力をもった生徒の育成」

(2) 委員構成

所属	役職等
宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科	准教授
茨城県立鉾田第一高等学校・茨城県立鉾田第一高等学校附属中学校	校長、進路指導副部長
鉾田市総務部まちづくり推進課	課長、係長
地域おこし協力隊:行方市、鹿嶋市(OB含む)、潮来市	
レイクエコーボランティアの会	副代表 他
茨城県鹿行教育事務所	主任社会教育主事
鹿嶋市教育委員会社会教育課	副参事
潮来市教育委員会生涯学習課	社会教育主事
神栖市教育委員会文化スポーツ課	社会教育主事
行方市教育委員会生涯学習課	参事兼社会教育主事
鉾田市教育委員会教育部生涯学習課	社会教育主事

(3) 具体的な取組内容

① 会議・交流会等

期日	内容	出席者等	備考
R3/6/15	第1回開発委員会(オンライン) ・ テーマに関する概要研修 「若者が多様な主体と連携してボランティア活動をしていくことによる地域への効果など、好事例の紹介」 (宇都宮大学・若園雄志郎准教授)	開発委員 19名 県生涯学習センター共創委員及び県教育庁総務企画部生涯学習課員4名含む	
7/21	第2回開発委員会(オンライン) ・ チャレンジ課題等の確認・調査内容結果報告 ・ 協議:モデルプログラム開発	開発委員 17名 県生涯学習センター共創委員及び県教育庁総務企画部生涯学習課員4名含む	
8/26	第3回開発委員会(オンライン) ・ 第2回開発委員会協議内容からモデルプログラム再提案について ・ モデルプログラム案の検討、決定「ボランティアの活躍による地域づくり支援 ～高等学校との連携～」	開発委員 22名 県生涯学習センター共創委員及び県教育庁総務企画部生涯学習課員2名含む	
R4/2/25	第4回開発委員会(オンライン) ・ 令和3年度課題解決チャレンジ事業実績報告(モデルプログラムの検証) ・ モデルプログラムの改善、次年度の計画について	開発委員 20名 県生涯学習センター共創委員及び県教育庁総務企画部生涯学習課員2名含む	

4/7	モデルプログラム実践のための打合せ モデルプログラムの計画、年間スケジュールについて	県立鉾田第一高等学校職員3名 開発委員2名	※1
5/2	交流会議 事業打合せ・企画提案・連携確認	県立鉾田第一高等学校職員2名、鉾田市商工会1名、開発委員1名	※1
5/6	交流会議 事業打合せ・企画提案・連携確認	県立鉾田第一高等学校職員2名、開発委員1名、開発委員1名	※1
6/9	交流会議 事業打合せ・企画提案・連携確認	県立鉾田第一高等学校職員3名、鉾田市役所職員1名、開発委員1名	※1
6/15	交流会議 事業打合せ・企画提案・連携確認	県立鉾田第一高等学校職員2名、鉾田市商工会4名、開発委員2名	※1
7/5	交流会議 事業打合せ・企画提案・連携確認	県立鉾田第一高等学校職員2名、鉾田市事業者31名、開発委員2名	※1
11/20	報告 モデルプログラムの検証・まとめ	開発委員12名 地域連携協働創出事業終了後	※1

※1 地域連携協働創出事業との関連を含む。

<実施にあたって(工夫点、注意点)>

令和3年度は、コロナ感染拡大のため、同時双方向通信(Zoom)を用いたオンラインまたは参集型と併用した形式で開発会議を実施した。令和4年度は、令和3年度のモデルプログラムが円滑に実践できるよう「地域連携協働創出事業」との関連を図り、関係団体等と打合せを含めた交流会議を実践した。



【開発委員会(同時双方向通信)】

② 研修・ワークショップ・講座等

期日	内容	対象者	備考
R3/12/3	モデルプログラム研修(ライブ配信) ①「グローバルな視点でみた若者×地域づくり」 (宇都宮大学准教授若園雄志郎氏) ②「ダイバーシティの視点に立った地域づくりについて」 (ダイバーシティ推進センター) ③「鉾田市の現状と課題」(鉾田市まちづくり推進課)	県立鉾田第一高等学校 第一学年 236名	
R4/1/21	中・高校生魅力発信講座(ライブ配信) ・「効果的なプレゼンテーションについて」 (株式会社しびつくばわー代表取締役 堀下恭平氏)	県立鉾田第一高等学校 第一学年 238名	※2
5/9	モデルプログラム研修(ライブ配信) ①「ダイバーシティの視点に立った地域づくりについて」 (ダイバーシティ推進センター) ②「グローバルな視点でみた若者×地域づくり」 (宇都宮大学准教授若園雄志郎氏) ③「鉾田市の現状と課題」(鉾田市まちづくり推進課)	県立鉾田第一高等学校 第一学年 235名 教職員 12名 鉾田市職員 4名	
7/15	中高生魅力発信講座 ・「若者の活躍によるボランティア活動の事例紹介～地域課題解決へのアプローチ～」(とちぎユースサポーターズネットワーク代表理事岩井俊宗氏) ・場所: 県立鉾田第一高等学校体育館	県立鉾田第一高等学校 第一学年 232名 教職員 9名 開発委員 1名	※2
9/9	中高生魅力発信講座 ・「魅力発信方法等についての講義～効果的なプレゼンテーション」及び「効果的な発信方法」(株式会社しびつくばわー代表取締役社長 堀下恭平氏) ・場所: 県立鉾田第一高等学校体育館	県立鉾田第一高等学校 第一学年 235名 教職員 15名 鉾田市職員 1名	※2

※2 地域の核となる人材・団体育成事業「中高生魅力発信講座」との関連を図る。

<実施にあたって(工夫点、注意点)>

令和3年度は、コロナ感染拡大のため、上半期の活動に制限があり、11月以降の実施となった。モデルプログラム研修については、2年間ともにコロナ感染が拡大していた時期と重なり、対策として同時双方向通信(ライブ配信)による研修とした。

令和4年度は、モデル校(茨城県立鉾田第一高等学校)第一学年全員が活動に参加することから、当該学年を対象にスキルアップを含めた研修を実施する必要があり、地域の核となる人材・団体育成事業(「中高生魅力発信講座」)との関連を図った。

③ 実践

期日	内容	対象者※2	備考
R3/11/14	ボランティア実践活動① ・ 鉾一放課後プロジェクト 「海のSDGsに関するワークショップ及び大竹海岸環境美化活動」 (元鹿嶋市地域おこし協力隊 松崎侑奈氏)	県立鉾田第一高等学校 第一学年 61名	
12/4	ボランティア実践活動② ・ 鉾一放課後プロジェクト 「鉾田市商店街環境美化活動及び魅力発見・発信活動」	県立鉾田第一高等学校 第一学年 80名	(協力) 鉾田市まちづくり推進課、 鉾田市商工会、鉾田市 内17事業所
R4/5/2 5/6	実践活動 ・ 鉾田Vプロジェクト(ほこぶら) ・ 鉾田市商店街の現状を把握	県立鉾田第一高等学校 第一学年 各126名	※1
6/9	実践活動 ・ 鉾田第一高等学校文化祭 市町村プロモーション動画を学級毎に制作し上映	県立鉾田第一高等学校 第一学年 235名 教職員 10名	鉾田市まちづくり推進課 視察
7/23 ~10/30	ボランティア実践活動 ・ 鉾一Vチャレンジ ① 鉾田市商店街・鉾田市事業所でのインタビュー及び 魅力発信活動 ② 鉾田市内環境美化活動	県立鉾田第一高等学校 第一学年 ①141名 ②94名	(協力) 鉾田市まちづくり推進課、 鉾田市商工会、鉾田市 内34事業所
11/20	成果発表 実践報告 ・ 「いばらきフォーラム(若者の活躍による地域づくり)」 分科会に発表者として登壇 ・ 場所:茨城県鹿行生涯学習センター	県立鉾田第一高等学校 第一学年 (代表2団体)8名	※1

※ 令和4年9月11日に、鉾田市商工会(いっぴんマルシェ実行委員会)主催「第29回いっぴんマルシェ」に、体験ブースの運営や「鉾一Vチャレンジ」で関係をもった事業所でのボランティア活動を自主的に実施。(生徒・教職員含め25名参加)

※ 令和5年2月24日に、県立鉾田第一高等学校体育館において、成果発表②実践報告会として「総合的な探究の時間 年間発表会」を、鉾田市まちづくり推進課、鉾田市商工会、鉾田市内34協力事業所等を招待して実施。

※1地域連携協働事業創出事業との関連を図る。

<実施にあたって(工夫点、注意点)>

1年目(令和3年度)は、開発したプログラムの妥当性を検証するため、対象者の人数に制限を設けて実施した。2年目(令和4年度)は、改善したプログラムを「総合的な探究の時間」に盛り込み、第一学年の全体に実施した。そのため、学年全員が円滑に活動できるよう、市商工会、鉾田市まちづくり推進課と連携を強化し、1年目の事業所の2倍(34事業所)に対し、事業所支援を行った。また、地域のイベントや協力事業所独自の活動等の情報を高校に提供し、ボランティアとして参加する機会と、実践活動の成果を発表する場を創出し、周知できる工夫をした。



【R3ワークショップ(海岸清掃)】



【R3鉾田市商店街環境美化活動及び魅力発見・発信活動の様子】



【R4ボランティア実践活動・銚田市商店街の現状把握】



【R4ボランティア実践活動(事業所訪問調査)】



【R4ボランティア実践の様子】

<プログラム全体の検証>

課題解決チャレンジ事業を実施するにあたり、①地域住民の地域のつながりやコミュニティに対する関心の希薄化、②地域づくりの担い手である若者の地域離れに歯止めがかからず、事態が深刻化していることが課題として上げられていた。本事業を通じて、若者が、地域のヒト・モノ・コトとふれあうことで、地域を再発見し地域への愛着と誇りを育むことや、若者が地域住民と協働しながら、地域おこしやまちづくり等に取り組むことにより、自己有用感を得て、自主的に社会貢献活動に取り組むことを目指した。令和3年度にプログラムを開発し、改善を重ねたプログラムを教育課程である「総合的な探究の時間」に関連付けて茨城県立銚田第一高等学校第一学年全員が参加し、計74回にも及ぶ地域貢献活動や事業所への活動支援を行った。

実践前後のアンケート結果から、「あなたの住んでいる地域で、何かに困っている人はいるか」の質問に対し、「いる」と回答した生徒が、令和3年度において6.4%に対し、活動終了後の令和4年度においては28.9%となり、地域の困りごとに目を向ける高校生が増えた。また、「今後も地域や社会のために役立つことをしたい」との質問に対し93.6%が肯定的な回答をした。そのうち具体的な活動として、「環境保全活動(+15%)」、「祭りやイベント(+8%)」、「高齢者の支援活動(+7%)」、「まちの魅力発信活動(+6%)」がそれぞれ向上した。さらに、今回の探究の時間で行った活動を継続して取り組みたいと17.9%が回答している。

今回のモデルプログラムを通じて、地域に目を向けていく機会が増え、地域のつながりや地域に対する関心が高まるなど、参加者の意識の変容が見られた。また、地域に出向き、地域課題を実感することで、自分たちができる地域貢献の方法を模索できるようになり、地域づくりの担い手としての実践力が身に付いた。

今後、第一学年が位置づけた「総合的な探究の時間」においての実践プログラムは、次年度の第1学年または第2学年が継続的に取り入れ、地域と連携した実践を継続していく予定である。また、特に連携の図れた事業所と高校は、商品開発への提案、イベントボランティアへの参加等の継続を予定している。